

情非婦大

太鷄氏源



東方社版

情 非 婦 夫

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十九年十月五日発行

定価三五〇円

著 者 源 氏 鶏 太

発 行 者 石 渡 磨 須 子

製 版 者 内 田 柳 次 郎

東京都文京区高田豊川町六〇番地

発 行 所 東 方 社

振替東京五七七四番
電話大塚(941)一八七三番
(七〇三六番)

(印刷・邦文堂印刷所)

夫婦非情

源氏鶏太

目次

サーヴェイス重役	夫婦ごっこ	牝鷄と小鳩	三色模様	夫の恋人	忘れられぬ夜
----------	-------	-------	------	------	--------

5	25	41	63	91	125
---	----	----	----	----	-----

露を嫌わず	天使	わかれ	百万円の美貌	夫婦非情	花に想う	天使の背中
-------	----	-----	--------	------	------	-------

291 271 247 223 195 175 145

装
幀

御

正

伸

サー
ガイ
ス
重役

先日、私が銀座の飲み屋で酒を飲んでいるとき、見知らぬ紳士から難題を持ちかけられて、大層困惑した。私は四分ぐらいしか酔っていないのに、紳士の方は、六分ぐらい酔っていた。あわせる、ちやうど一人前の酔っぱらいが出来るのだが、四分と六分では、はじめから私の方に、分が悪かった。

「君かね、三等重役なんて、実にくだらん小説を書いたのは。」

紳士は、いきなりこう言つて、私をハッタと睨みつけたのである。年輩は五十前後、服装もきちんとしている。しかし、中味のほどは、私に不明であつた。

「ええ、まア。」

私は曖昧に答えた。しかし、何故こんな風に睨まねければならぬのか、その理由がのみ込めなかつた。もうひとつ、私はこう言う席で、小説の話をされることを好まない性分である。

「ええまア、とは、何んだ。君は、自分が書いたのなら書いた、とはつきり白状したらどうだ。」

紳士は憎々しげに言う。

「では、書きました。」

私は、ちよつと、ふて腐れたように答えた。

「では、だけ余計である。」

そこで紳士は、ビールをぐつと飲んで、

「君が、あの小説を書いたために、どれだけの人間が、迷惑しているかと言うことを考えたことがあるか。いや、みんな憤っているんだぞ。」

「そんなことはありませんよ。たとえば、あの小説が映画になつて余命いくばくも無いようなお年寄たちが、腹をかかえて笑つてくれたんです。私はそれを見て、あんな小説でも書いてよかつた、と思つたくらいです。」

「バカな。それは、とんでも無い偏見である。」

「じゃあ、いつたい、誰が憤^{おど}つてる、とおつしやるんですか？」

「三等重役だ。」

「え？」

「世間の三等重役たちが小説三等重役を憤つてるんだ。あんな小説さえなければ、俺たちは、三等重役などと言われずにすんだのだ。普通の重役として立派に通り、肩身をせまくすることは無かつたのだ。君の罪は万死に値するぞ。恥を知り給え。」

「恐れいました。」

「しかも、君は、もうひとつ、重大な罪を犯しているのである。」

「そうでしょうか？」

私はすこし不安になつてきた。

「君は、一等サラリーマンと言う言葉を流行させている。以来、社員どもが、重役のことを三等重役と言う癖に、自分たちは一等サラリーマンだ、と思いつてゐる。」

「いけませんか？」

「言うなれば、いかん、いかん、オールいかんではないか！」

と、紳士は叫んだ。しかし、そう叫ぶ時の紳士の顔は、ほんのちよつとではあるが、嬉しそつであつた。

私は、いつたいこのあと、どう言うことになるのであろうか、と途方に暮れていた。私の酔いは三分に減退し、紳士の酔いは、七分に増進してゐるようである。

「半年程前である。」

と、紳士は、なおもあとを続ける魂胆のようであつた。私は急いでビールを飲んだ。

「わしは、大の便所に入つてゐた。」

「はア。」

「こら、そんなに臭げな顔をするな。話だけである。」

「そうでしたな、安心しました。」

「用が終つてからも、わしはしばらく、深刻壮嚴な面持で、会社の将来を案じていたのである。何故ならば、わしは昔から、厠で沈黙考ちんもつこうする癖があるのだ。社長になつてからも、重大な問題に直面すると、社長椅子に深々と腰を下して対策を練るよりも、厠の窮屈な姿勢で考えた方が、ハッとインスピレーションを感じる率が多いからである。したがつて、その点、わしはまことに庶民的な社長さんだ、と自負している。」

「同感です。」

「当り前だ。ところが、そのとき、誰かが便所へ入つてきた。しきりに、三等重役が、とか、要するに、三等重役さ、とか話し合つている。わしは社長であるが、ほかにも重役が五人いる。だからその三等重役とは、わしのことでは無い、と思つていた。恐らく、わしを除いた五人の重役どものことであろう、と思つていた。うん、そんなら、社長と雖も同感である、と思つていた。」

「そうでしょうねえ。」

「ところが、そのうちに、あの社長にそんな度胸があるもんか、女には甘い癖に、社員たちにはケチで、だから、三等重役ではだめなんだ、と得々として話している。わしは、愕然とした。我慢できなくなつた。そこで、わしは、いきなり、大の便所の中から、バカもん！ 社長がここにいるのに、何んたる無礼な対話をかわすのだ！

待て、そこを動くな、と怒鳴りつけて、大急ぎでズボンのバンドを締め、ボタンもはめて、飛び

出したのである。」

「待つていましたか？」

「いなかつた。雲を霞と逃亡したあとであつたよ。」

「残念でしたのう。」

「勿論である。わしの会社には、百人ぐらいの社員がいる。聞いたような声であるが、わしには、どいつであるか分らんのだ。しかし、わしは逃げたあとのひつそりした便所の中に立つているうちに、どうしても、犯人を捉えてやりたくなつた。でなかつたら、ますます増長させる恐れがある。社長どもに、この上増長させては、どうにもならん、とわしはかねてから思つていた。そこで、わしは社長室へ戻るかわりに、事務室へ乗り込んでいった。まるで、敵陣へ乗り込むような気分であつたな。」

「勿論、武者ぶるいもお感じになつたでしょうね。」

「愚問はよし給え。そんなことは、当然だと分る筈ではないか。わしは、百人の社員の顔を、一人一人、覗き込むように睨んでいった。しかるに、どの社員も、いかにも殊勝げに仕事をしている。めつたに、顔をあげようとはしなかつたのである。わしは、大いに迷つた。迷いぬいたあげく、一人、どうも臭い男を発見した。その男は、必要以上にうつ向いて、わしに顔を見られるのを極度に厭がつていらしいのである。心にやましいところのある証拠だ。そこで、わしは、わざと何気な

いような顔で、その男のうしろを通りすぎてやつた。数歩過ぎてから、ひよいと振り向いてやつた。果して、その男は、わしの方を見ていた。それからあわててうつ向いた。しかしもう遅いのである。わしはつかつかと戻つて、こら、君だろう、さつき便所で愚劣な対話をしていたのは、と言つてやつた。ところが、その男は、ケロリとして、私は今から三十分ぐらい前には便所へ行きまして。嘘つけ、たつた今であろうが、と私は言つた。すると、その男は、ねえ、諸君、そうだね、間違いないね、と周囲に賛成を求めるのだ。周囲の社員どもは、そうだよ、いや、三十二分前であつた、いやいや、三十五分前であつた、と口々にロクでも無いことをいう。共同戦線を張つてゐることは一目瞭然である。わしは、その男に間違いないと確信しているのだが、証拠しょうこが無い。社長と雖も、証拠が無ければ、どうにもならぬ。それが民主主義の不便さである。実に、無念であつた。ところが、その男が、更に言つた。社長、愚劣な対話とは、いつたい、どういう対話ですか、後学のために、詳しくご説明願います。と、そこでわしは、わしのことを三——、そこまでいつて、わしは、危く口を噤むことに成功した。まさに、危機一髪であつた。わしは、もうええ、と言つて、靴音も荒々しく、社長室に戻つた。そのときのわしの心境がどんなであるか、君に分るかね。」

「さぞかし、立腹——」

「違ふ。」

と、紳士は、断乎否定して、あとは瞑想するように、しみじみと言つた。

「深い孤独である。」

二

臭い話は、やつと、終つた。私は、解放されたように、ホッととして、ビールを飲んだ。それから今のうちに帰つた方が無難であろう、と判断した。幸いに、紳士はまだ、瞑想に耽つてゐるなら、いまだ。私は、そつと、脚高の椅子から降りようとした。

「逃げるな。」

紳士は、いきなり、私の腕を掴んで叱咤した。それは、吃驚^{びつくり}するようなバカ力であつた。

「まだ、話があるんだ。」

「え、まだですか？」

私は、ウンザリしたが、紳士は、平気な顔をしている。私は、観念した。

「わしのことを三等重役というが、こんどはそうでない証拠を話してやる。」

「どうぞ、どうぞ。」

私は、ヤケクソになつて答えた。

「昨年、わしの会社で三人の社員を採用することにしたのである。ただし、採用試験には、百人に来て貰つた。しかるに、実際に採用したのは四人であつた。」

「余ッ程、優秀な人間がいたのですね。」

「違う。」

「と、いうと?」

「その四人目の男は、あまり成績はよくなかった。しかし、おとなしそうであつた。もち論、これからの社員は、おとなしいだけでは能が無いのである。しかるに、採用した。何故だか、分るかね。」

「分りません。」

「察しが悪いのう。」

「ごめんなさい。」

「まア、ええ。要するに、その男の父親というのが、十五年前に退職したわが社の社員であつたのである。」

「すると、一種の縁故採用ですな。」

「いや、縁故採用というような、そんなケチなものでは無い。その父親は、十年前に死んだのである。そのあと、その細君が困苦^{こんく}欠乏^{けつぼう}に堪えながら、やつと息子を一人前の男にしたのだ。しかも、未亡人の終生の念願は、息子を父親の勤めていた会社へいれたいということであつた。息子もまた心からそう思っている。死んだ父親も、自分の息子が、自分の志を継いで、もと自分の一生をささげた会社に勤めてくれたら、どんなにか歡ぶであろう、ひよつとしたら地下でうれし泣きしている

かもしれない、とわしは思つた。」

「分ります。」

私は、同感の意を表した。それに私は、こう言う風な美談が好きである。

「いいかね、炭鉱なんかには、親子二代、あるいは三代にわたつて、同じ石炭山で働くと言うことがよくあるそうだ。しかし、一般の会社となると、そう言う例は、めつたに無い。わしは、つらつらと考へた。これからの会社は、親子二代、三代にわたつて勤めるようではなければならぬ。そうすればそこに脈々たる伝統精神が継がれていき、会社の基礎は磐石となるに違ひない。したがつて、社員たちも亦、やがて、自分の息子が勤める会社だ、と思へば、すこしでもよくして残してやろう、と一所懸命に働くに違ひない。こう言う思想を、君は、どう思ふかね。」

「立派です。」

私は、即座に言つた。紳士は、満足げに頷いた。

「その筈である。こう言う立派な思想を持つてゐるわしを三等重役とは、以てのほかではないか。うん。それでわしは、その男を、特別に採用するように、取締役会で提案した。しかるに、五人の正真正銘の三等重役どもは、しかし、成績がどうのこうの、と難色をしめした。わしは、腹が立つた。何んと言う分らずやばかりであろう、と癪に触つてたまらなくなつた。そこで、社長の高橋の一声で、いや、あの男は、きつと将来、わが社を背負つて立つてくれるに違ひない、だから、採用